

# 画家ツェツィーリエ・グラーフ・プファフと ユダヤ人画商

## 一ナチ略奪書籍の蔵書票を契機に一

安 松 みゆき

### 【要 旨】

本稿は、あるナチ略奪書籍の帰属が蔵書票によって明らかとなったことを受けて、鷗外の『独逸日記』に登場し、のちにナチと関係を取り結ぶことになる画家ツェツィーリエ・グラーフ・プファフとユダヤ人画商との関係を確認するものである。バイエルン州立図書館は、同館所蔵のナチ略奪書籍について、蔵書票の名前により元の所有者がユダヤ人画商カスバリであることを確定している。これを受けて本稿は、まず同図書館が明示していない蔵書票の作者を画家ツェツィーリエと同定し、この画家と画商の関係へと調査をすすめた。その結果、彼女が関わった画商にはユダヤ人が多く、ユダヤ人画商は前衛的な作品だけでなく保守的な作品も扱い、美術界をリードしていたことを指摘した。

### 【キーワード】

蔵書票、画家ツェツィーリエ・グラーフ・プファフ、画商カスバリ、  
ミュンヘンのユダヤ人画商、画商グルリット

### はじめに

戦後のドイツの美術動向を振り返ると、たとえば、ウーヴェ・ハルトマンによる『第二次世界大戦の文化遺産 *Kulturgüter im Zweiten Weltkrieg*』の研究がその例として挙げられるように、ナチ政権下では芸術および文化政策が人種政策と結びついてユダヤ人からの美術品の略奪を引き起こしたことから、戦後になるとナチによる略奪品の帰属をめぐる研究が必要不可欠になってゆく<sup>1</sup>。近年にも美術史家兼画商ハインリヒ・グルリットからの遺産を受け継いだ息子コルネリウスのもとで、ナチの略奪美術がまとまって発見されたことから<sup>2</sup>、関連研究もより一層活発化している。

小論では、そうしたナチの略奪に関わる一つの発見を契機として、ナチ政権下で活躍した画家ツェツィーリエ・グラーフ・プファフ (Cäcilie Graf Pfaff : 1862-1939、以下ツェツィーリエと略記) とユダヤ人画商との関係を振り返るものである。この例では、ユダヤ人から略奪された対象は書籍だが、後述するように元の所有者を明らかにしたのはツェツィーリエが制作した蔵書票であった。本稿では蔵書票がナチによって評価された美術家による版画作品であることにも注目する。この書籍の返還経緯については、すでにミュンヘンの州立図書館が報告しているので、本

稿ではその報告を紹介した上で、蔵書票を制作した画家ツェツィーリエと彼女の関わった画商の多くがユダヤ人だったことを確認し、ユダヤ人との関係で画家が活躍していたことの一部を明示したいと思う。

## 1 バイエルン州立図書館の報告と所蔵者アンナ・カスパリ

### 1.1. ナチの略奪

問題の書籍のナチによる略奪については、2014年に『図書館マガジン、ベルリンおよびミュンヘン州立図書館報告書 *Bibliotheks Magazin, Mitteilungen aus den staatlichen Bibliotheken in Berlin und München*』<sup>3</sup>に、また2016年4月時点でバイエルン州立図書館のホームページにも公開されているので<sup>4</sup>、それら（以下、図書館資料とする）を参照しつつ以下に概略を説明する。

バイエルン州立図書館によれば、1938年から39年末にかけてミュンヘンのゲシュタポ（秘密警察）がおこなった美術作品等略奪の対象者に、ミュンヘンのユダヤ人画商のアンナ・カスパリ（Anna Caspari : 1900-41）が含まれていた〔図1〕<sup>5</sup>。彼女は1939年1月19日に、当時住居としていたホテル・コンティネンタルとブリエンナー通り52番地にあった倉庫から、22点の油彩画と140冊の書籍、無名の版画家の作品を、ナチによって没収されたという。なお没収された絵画作品についてはこの図書館資料には取り上げられていないので後述する。ナチに押収されたすべての書籍は、戦後バイエルン州立図書館に寄贈されたが、押収した際の記録では、個人蔵でなく「画廊カスパリ」の所蔵であったという。



図1 《アンナ・カスパリ》

### 1.2. ゲオルク・カスパリについて

もともと「画廊カスパリ」は、アンナの夫ゲオルク・カスパリ（Georg Caspari : 1878-1930）が設立したものであった。ゲオルクはベルリン出身で、1912年にミュンヘンに移り、第一次大戦勃発一年前の1913年6月20日に、アイヒタール宮殿（Eichtal-Palais）に画廊を開設したという。このことは、ニューヨークで発刊された芸術雑誌『アメリカン・アート・ニューズ *The American Art News*』にも紹介され、その記事では、ゲオルクは19世紀美術や古い時代の絵画、アンティーク、版画を扱う画商のひとりとして評価されている<sup>6</sup>。

図書館資料では、ゲオルクはモデルネの作品を扱ってすぐにミュンヘンでは代表的な画商のひとりとなり、成功を収めたと説明されている。その妻になったアンナは、図書館資料によると、ポーランドのブレスラウ出身で、1920年に美術史を学ぶためにミュンヘンに来ていた際にゲオルクと知り合い、1922年に結婚して二人の息子を授かった。ゲオルクが1930年に自動車事故で亡くなったのち、アンナは不況のなかでギャラリーの経営を引き継ぎ、ナチによって強制廃業させられる1939年まで営業したという。さらに、バイエルン州立図書館の説明では、1930年代にはカール・ハーバーシュトック（Karl Haberstock : 1878-1956）やユリウス・バーラー（Julius Böhler : 1860-1934）<sup>7</sup>といったナチ時代を代表する画商たちにとっても、アンナは仲介者かつ鑑定家として活躍したとされる。

引き続き図書館資料によると、ナチ政権下においてユダヤ人であったアンナは迫害を受け、1938年に英国への逃亡を企てた。英国を選んだのは、二人の息子パウル（1922 -）とエルンス

ト（1926—）がすでに数年前からカレッジで学ぶために<sup>8</sup> ロンドン近郊に寄宿生活を送っていたからであったとされる。彼女の度重なる申請は、しかしドイツ当局から拒否され、最終的に1941年11月20日にアンナはドイツ軍が占領したりトアニアに移送され、それから5日後に、リトアニアの都市カウナスで殺害された<sup>9</sup>。

戦後になってアンナの息子たちが1948年に返還手続きを始め、そのときにバイエルン州立図書館の書籍の行方が問題になった。しかし戦争による破壊や混乱によって目録も残っておらず、また芸術関係の貴重本は戦火で焼失してしまったものも多く、結果的に二人の求める返還の話はそれで終わったという。

ところが、2003年以降図書館に保管されていたナチに押収された書物のなかから、カスパリ蔵書の4冊を特定することができた。それを可能にしたのが、蔵書票であったという。ゲオルクの名前の書かれた蔵書票が、書物に貼付けられていたからであった。ミュンヘンのゲシュタポから押収後に図書館に寄贈されたときの「寄贈番号」も、そこに記されていたという。特定できた書物は、最終的に2014年11月28日にロンドンのパウル・カスパリに返還された。

その該当する書籍のうち一冊については、以下のようにインターネット上で紹介されている。  
Theodor Heinfius : *Der Bardenhain für Deutschland, edle Söhne und Töchter, Ein Schul- und Familienbuch*, erster Theil, dritte, genau durchgesehene, verbesserte und vermehrte Ausgabe, Berlin 1819.

（訳出）テオドア・ハインフィウス『ドイツのバルデンハイン 気高い息子と娘たち 学校や家庭の教科書』第1部、改訂増補第3版、ベルリン、1819年。

## 2 《蔵書票 ゲオルク・カスパリ》とその作者

さて略奪された貴重本の返還を可能にした蔵書票だが、蔵書票とは持ち主を示す機能を持つが、実は制作した画家からすれば重要な一美術作品である。

今回注目する《蔵書票ゲオルク・カスパリ Exlibris Georg Caspari》は、大きさは縦14cm、横7cmのアクアティントの作品である〔図2〕。蔵書票の制作者については、バイエルン州立図書館では同定されていない。

しかしその制作者は、ツェツィーリエと特定できる。画像下の「蔵書票ゲオルク・カスパリ」と記した文字の領域の上端に小さな字で「C. GRAF-PFAFF」と印字されていることや、ツェツィーリエの孫にあたるエルヴィン・アルノルト博士が所蔵する摺りに、自筆の署名が入っているからである〔図2〕。このツェツィーリエは、筆者がながらく画業を追い続けている画家であり、これまでの調査から同じ構図の作例が彼女の作品として残されていることが確認できるからである。ツェツィーリエとは、鴎外の『独逸日記』にも登場する女流画家（日記では女子画学生）で、近代洋画家原田直次郎への恋心を抱いていたといわれ、特に日本において知られる。20世紀にミュンヘンを中心に活躍し、保守的で写実的な作風をナチ時代に評価されて、ヒトラーに作品を買い上げられたが、それゆえに戦後のドイツでは歴史から名前が消えた画家でもある<sup>10</sup>。

では、蔵書票はどのような作品なのかをみてみよう〔図2〕。蔵書票の縦長の画面には、暗闇の森を背景にポブスタイルの少女の上半身のポートレートが描かれている。横向きの少女は、前



図2 《蔵書票ゲオルク・カスパリ》  
アクアティント, E. アルノルト所蔵

屈みに視線を足下に向けている。身にまとっている衣服の植物の模様から、彼女は森と繋がる存在、たとえば森の妖精を想起させる。この少女のモデルとなったのは、おそらくその容貌から画家ツェツィーリエの一人娘ゾマデヴィと推察される。ツェツィーリエは、作品のなかに娘をモデルにして描くことがしばしばあり、また自然のなかに人物を登場させて幻想的な雰囲気をつくりだすことを得意としていた。この作品もその流れにのるものといっただろう。五分の一ほど下の部分に蔵書票のために文字の欄が設けられ、そこに世紀末に流行したと思われる書体で、蔵書票という「Exlibris」の文字と持ち主の氏名「Georg Caspari」が二行にわたって記されている。

この作品の制作年代は不詳である。ただしモデルのゾマデヴィの年齢<sup>11</sup>とツェツィーリエのC. GRAF-PFAFFのサインを指標にすれば、おそらく1901年頃の可能性が指摘できる。論者はこの作品が彼女の孫にあたるエルヴィン・アルノルト博士の元にも所蔵されていることを確認しており、[図2]にそれを掲載した。そこには右下に自筆のサインが認められる。

### 3 画家ツェツィーリエと画商

#### 3.1. 問題提起

ここまで得られた知見を整理すれば、ユダヤ人の画商カスパリからナチが略奪した書籍に、ツェツィーリエが制作した蔵書票が貼付けられていて、戦後にその記名から書籍の元の所有者が確定した。ナチが評価した画家による蔵書票が、ユダヤ人画商の所有権確認の手がかりになるとは皮肉な偶然だが、当時のさまざまな傾向の画家と、ユダヤ人画商との関係を調べてみると、これは単なる偶然とはいえない出来事に見えてくる。ツェツィーリエと画商との関係へと話をすすめてみよう。

ツェツィーリエの作品を展示販売した画商については、論者の調査ではこれまでに名前は把握し得たが、それら画商がユダヤ人か否か、またどのような作品を扱う画商であったのかといった具体的な検討はまだ課題として残されている。一般的に画家と画商との関係は近代になると活発になり、画家にとってパトロンと同様に重要な存在のため、特に印象派における画商の役割がしばしば考察されている<sup>12</sup>。ナチ時代については、略奪作品の返還問題から画商が近年注目されはじめ、本論で取り上げる画商についても、研究が着手されはじめている<sup>13</sup>。

本論では、そうした研究状況を踏まえつつ、19世紀末からナチ時代まで活躍したツェツィーリエが関係した画商の多くがユダヤ人で、かれらは前衛的な作品から保守的な作品まで幅広く目配りして、美術界をリードしていたことを確認したい。

現在、筆者はツェツィーリエの作品のカタログレゾネの完成を目指している。これまで収集し得た情報のなかから、ツェツィーリエが関わった画商として、既述のカスパリ以外にさらに4人が挙げられる。ベルリンとミュンヘンの画廊を運営していたヴォルフガング・グルリット(Wolfgang Gurlitt : 1888-1965)、ベルリンとミュンヘンで画廊を営んでいたフーゴー・ヘルビング(Hugo Helbing : 1863-1938)、ヴィースバーデンの画商リヒャルト・バンガー(Richard Banger: 生没年不詳)、そしてライプツィヒの画商F・W・ミッテンツヴェイ＝ヴィンジュ(F・W・Mittentzwey-Windsch: 生没年不詳)である。各画商について関連資料を渉猟してユダヤ人であったのか否か、そしてどのような傾向の画廊だったのかを確認し、ツェツィーリエが関わった画商とユダヤ人の関係を提示し、当時の画家の活動の一端を明示したい。

#### 3.2. 画廊「カスパリ」と美術作品

まず、今回の考察のきっかけとなった「画廊カスパリ」は当時の現代美術を扱っていたとのこ

とだが、バイエルン州立図書館の報告では、前述したように19世紀後半から20世紀初期モデルネの作品や古い時代の作品を扱っていたとされる指摘で終わっている<sup>14</sup>。確認しうる範囲で、この画商が扱った画家と作品を追ってみよう。

### 3.2.1. モダニズムの画家 A・ビュルガー

はじめに1920年の『アメリカン・アート・ニュース *The American Art News*』を参考にすると、ビュルガー(A. Buerger)という画家の最新の展覧会をおこなっていたことがわかる。ビュルガーは、優れたセンスを持ったモダニズムの画家とされ、セザンヌとゴーギャンからの影響を受けた作品を描いている。当時「画廊カスパリ」で25枚の油彩画が展示されたが、特に肖像画は近代絵画のなかで優れたものと見なされた<sup>15</sup>。また別の資料からは現代作家を取り上げていたミュンヘン分離派の展覧会に関わっていたことが指摘されている<sup>16</sup>。

### 3.2.2. オスカー・ココシュカの作品《ベルリンのパリ広場》

2014年4月10日の『ベルリン新聞 *Berliner Zeitung*』や後述する雑誌などの資料から、「画廊カスパリ」で扱われていた数点の作品を特定することができる。まず一点目は、オスカー・ココシュカ(Oskar Kokoschka: 1886-1980)の《ベルリンのパリ広場》である。

2014年4月11日のドイツの雑誌『ターゲス・シュピーゲル *Der Tagesspiegel*』に、ベルリンのプロイセン文化財団の事務所に掛けられていたココシュカの《ベルリンのパリ広場》がナチによって押収されたことを報告する記事が掲載された。それによると、元ベルリンプロイセン文化財団理事長クラウス・ディーター・レーマン(Klaus Dieter Lehmann)がかれ自身の事務所の壁に1999年から飾っていた。なおレーマン以前の理事長のヘルマン・パルツィンガー(Hermann Parzinger)は、それが略奪美術品の疑いがあったため、飾ることはなかったという<sup>17</sup>。

モニカ・グリュッター(Monika Grütter)の説明では、1926年にブランデンブルク門の前のパリ広場を画家のマックス・リーバーマン(Max Liebermann: 1847-1935)の家と一緒に描いた作品とされる。リーバーマンはベルリンの20世紀初頭のアカデミーを代表し、ドイツ印象派を牽引したユダヤ人画家である。ココシュカはナチの退廃芸術を代表する作家と蔑まれていた。そのココシュカによる作品が、ナチによって排斥されたミュンヘンの画商ゲオルグ・カスパリの所蔵となり、かれの未亡人アンナが1933年あるいは34年にドレスナーバンクのミュンヘンの支店に売却したとされる<sup>18</sup>。

同誌にも言及されたドイツ美術史ドキュメンテーションセンターの絵画インデックスの情報には、この作品の所蔵者名が時系列で書かれている<sup>19</sup>。それによれば、1926年2月1日の時点では、ベルリンの「画廊パウル・カッシーラー(Galerie Paul Cassirer)」と、フランクフルト・アム・マインの「画廊M・ゴールドシュミット & Co. (Galerie M. Goldschmidt & Co)」と共同で所有し、わずか二週間ほどのちの同月16日には、クレフェルトのヘルマン・ランゲ(Hermann Lange)のコレクションに移っている。1928年の6月16日に再度「画廊パウル・カッシーラー」の手元に戻り、その後「画廊カスパリ」の元に移行した。それが何年なのかは不明とされる。そして1934年以前にドレスナーバンクのミュンヘン支店の所蔵となったという。現在は、ベルリン州立美術館国立ギャラリーに所蔵され、同館ではNr. ng2642 030の作品として登録されている。

この作品について、たとえば、1956年に刊行されたハンス・マリア・ヴィングラー(Hans Maria Wingler)の『オスカー・ココシュカ 画家の作品 (*Oskar Kokoschka: das Werk des Malers*)』では、《ブランデンブルク門》のタイトルで紹介されている<sup>20</sup>。大きさは縦77 cm、

横 110 cm で、制作年についても 1927 年のチューリヒでの展覧会では 1925 年として紹介されているため、少なくとも 1926 年以前に描かれたとする見方を提示している。1956 年時点では、所蔵先はクレフェルトの個人蔵から 1935 年の押収後にベルリン国立ギャラリーに保管され、終戦の 1945 年以後に行方不明となり、ベルリンで焼失した可能性を示唆している。

このように 1956 年の時点には、まだココシュカの作品の所在は不明であった。まさに近年の帰属研究によって大きく修正される状況が生み出されたといえる。

### 3.2.3. ロヴィス・コリンツの肖像画

アンナの所蔵作品でナチに押収された作品のなかに、ロヴィス・コリンツ (Lovis Corinth : 1858-1925) による肖像画がある。現在はバイエルン国立美術館・州立図書館・グラフィックコレクションに加わっているとされる。1913 年に刊行されたロヴィス・コリンツのモノグラフによると、他に 1910 年制作の《勝利者》が、ベルリンのカスパリ氏の所蔵と記載されている<sup>21</sup>。ロヴィス・コリンツは、印象派の影響を受けて、独自の表現主義の方向を突き進んだ画家である<sup>22</sup>。

### 3.2.4. ゴッホの《オーヴェールの庭》1890 年

ベルリンのユダヤ人の画商で、日本美術および東洋美術の研究者でもあったクルト・グラザー (Curt Glaser : 1879-1943) は、1911 年にゴッホ (Vincent van Goch : 1853-1890) の《オーヴェールの庭》の作品を手に入れていた<sup>23</sup>。アンドレアス・シュトロブル (Andreas Strobl) によれば、それは、1914 年にはすでに画廊カッシーラーに売却されているので、グラザーの手許にあった期間は 3 年にすぎなかったという<sup>24</sup>。ブレスラウのコレクターであるレオ・レヴィン (Leo Lewin) が所蔵していたゴッホの別の作品《オーヴェールの庭》をミュンヘンの画廊カスパリが入手し、それもカッシーラーで展示されていたとされる<sup>25</sup>。

以上のように「画廊カスパリ」は、ココシュカのような、ナチが退廃美術と見なすことになる前衛的な画家の作品を盛んに取り扱っていた。しかしその一方でゲオルク・カスパリは、ナチ時代よりかなり前ではあるが、その当時としても保守的な傾向のツェツィーリエに、蔵書票の制作を依頼している。おそらくこの依頼は、ツェツィーリエにとって大きなチャンスであり、カスパリが幅広い傾向の画家に目を向け、機会を与えていたことがうかがわれる。

## 3.3. ベルリンのグルリット

ユダヤ人の画商フリッツ・グルリット (Fritz Gurlitt : 1854-1893)<sup>26</sup> によって 1880 年にベルリンで設立されたのが、近年の研究上で注目されている「ギャラリー・グルリット」である。このギャラリーは主に前衛芸術を扱っていたことが知られる。1907 年にフリッツが亡くなると、息子のヴォルフガングがその後を引き継いだ<sup>27</sup>。ツェツィーリエとの関係を見ると、既述のエルヴィン・アルノルト博士は、ギャラリー・グルリットで開催予定のツェツィーリエと夫オスカー・グラーフの展覧会のパンフレットを保管している。その作品リストには、ツェツィーリエの 12 点の油彩と 18 点のエッチングのタイトルが記載されており、この点数は、死後にクルムバッハで行なわれた回顧展の次に多い。パンフレットに年代の記載はないが、1905 年から 1907 年の間におこなわれたと推定できる。

1943 年には爆撃でギャラリーは破壊されてしまう。ヴォルフガング・グルリットは退廃芸術とされた作品の国外への売却を通じてナチに協力し、また戦後になるとリンツ市立美術館のために作品購入に協力し、自らも同美術館の館長として 1945 年から 1957 年まで在任した<sup>28</sup>。

では具体的にこの画廊はどのような作品を扱っていたのだろうか。私見ではまだそれをまとめ

た研究書は見当たらないが、ベルリンのフリッツ・グルリットが所蔵していた作品についての情報は、マールブルク大学の画像アルヒーフから得ることができる。同大学データベースには所蔵作品の写真が登録整理されているのである<sup>29</sup>。それによると、ドイツ表現主義のヘッケンドルフ (F. Heckendorf) の《南方の風景》、キルヒナー (E. L. Kirchner) の《三人の裸婦》、ペヒシュタイン (M. Pechstein) の《後ろ向きの裸婦》、リーバーマンの《馬具を付けられた馬》のほか、マティス (H. Matisse) の《朝の化粧》、ムンク (E. Munch) の《裸婦》、ピカソ (P. Picasso) の《裸婦》がある<sup>30</sup>。しかし、これらはフリッツを引き継いで現存するヴォルフガングのコレクションのなかに、今のところ確認することはできない。

ヴォルフガングのコレクションは、オーストリアのリンツ市立美術館の基礎を築いていることで知られる。同美術館が、ヴォルフガングのコレクションを1953年に170万シリングで購入したからとされる<sup>31</sup>。具体的な作品としてたとえば、ロヴィス・コリントによる《ヴォルフガング・グルリット肖像》(1917年、油彩)がある。ヴォルフガングの肖像画だが、ヴォルフガングは画廊の一室に腰掛けて真正面を見る半身像で描かれている。もう一点、特に注目されるのは、ココシュカによる《ヒルシュ肖像》(1907年、油彩)である。この作品は、1937年第一回退廃美術展に展示され、その後同展の象徴的な作品のひとつとして紹介される機会が多い。

このユダヤ系画商グルリットにおいても、ツェツィーリエの作品を扱いながら、その一方で退廃美術展で否定されるココシュカなどの作品を所蔵していたことが確認できる。

### 3.4. ミュンヘンのヘルピング

画廊ヘルピングについては資料が残されており、最近オークションに注目した研究が着手されている<sup>32</sup>。ユダヤ人のフーゴー・ヘルピングがミュンヘンのヴァグミュラー通り16番地に1885年に店舗を置き、経営していた<sup>33</sup>。その後1906年以後はベルリン、フランクフルトにも支店をつくり、経営基盤を広げていった。パウル・カッシーラーと1916年から1920年代において、ミュンヘンに美術作品とアンティークのためのオークションハウスも運営していく。1930年から35年までオークションハウスでは数多くの売立て用の図録を発行するなど、同時代のオークションハウスのなかで最も大規模で活動的な例のひとつに位置づけられる。

しかし1935年には、ユダヤ人であるために造形芸術帝国財務協会メンバーから閉め出され、オークション実施権利も剥奪された。1938年には画廊も閉鎖され、いわゆる「水晶の夜」のユダヤ人襲撃において自宅で撲殺されている。息子と妻もミュンヘンのオークションハウスもアーリア化され、アドルフ・ヴァインミュラー (Adolf Weinmüller) に譲渡される<sup>34</sup>。

ツェツィーリエはオスカーとともに、この画廊の下でも個展を開いており、そのパンフレットのデザインはギャラリー・グルリットのもと同じであるので、同時期(1905-07年頃)のことであろう。またヘルピングが1910年に実施した日本美術のオークションにおいて<sup>35</sup> ツェツィーリエが序文を担当している。

画廊ヘルピングからは800点にも及ぶ図録が残されており、多くは個人コレクションの売り立てであり、工芸から絵画・彫刻、古代から現代、西洋から東洋までさまざまな対象が取り扱われる<sup>36</sup>。必然的に登場する現代絵画も多様になるが、ツェツィーリエとオスカーの例のような、個展や新作の販売、特定の画家との関係などについては、管見によればまだ研究がすすんでいない。

### 3.5. ヴィースバーデンのバンガー

ヴィースバーデンの画廊ギャラリー・バンガーにおけるツェツィーリエの展覧会は、夫オスカー・グラーフ、アレクサンダー・ケスター (Alexander Koester : 1862-1932)、オット・ライバー

(Otto Leiber : 1878-1958)<sup>37</sup>とともに1908年5月に「第二回春季エリート展覧会」と題して実施された。そのパンフレットがアルノルト博士の元に所蔵されており、バンガーに関してこれまで確認し得た唯一の資料であった。その図録に、リヒャルト・バンガーがルイーゼ通り9番地で、ホテルメトロポールの隣に画廊を開いており、取り扱うのはあらゆる技法による作品と工芸品、彫刻、そしてミュンヘンの籐家具など、と書かれている<sup>38</sup>。

そうしたなか、オークションのインターネットのサイトからも、ヴァルター・ケスター (Walther Käster) による《変化する夏の景色》(制作年不詳、油彩、カンヴァス) の作品の裏に「ギャラリー・バンガー、ヴィースバーデン」のスタンプが押されていた事実と、オイゲン・シュピロ (Eugen Spiro: 1874-1972) の《椅子に座る裸婦》(1908年、油彩) の所蔵情報のなかに「ヴィースバーデン、リヒャルト・バンガー (Richard Banger)」と記載されていることが確認できた<sup>39</sup>。シュピロはユダヤ人の油彩画家で版画家とされ、印象派とフォーヴの影響を受けて、主に戦前はベルリンの分離派に所属して活躍した画家である。分離派では会長にまで推挙されたが、ナチ時代と重なり、1935年にアメリカに亡命して、風景画と肖像画を得意とした画家の立場で生涯を終えた。

またベルリン・ギャラリーのインターネットのサイトから、ギャラリー・バンガーで行なわれた1910年のミュンヘンの新芸術家協会の展覧会では、カンディンスキーやヤウレンスキーといったドイツ表現主義の作品が展示され、1921年の初期展覧会では、ココシユカヤノルデの版画作品が出品されていたことが認められた<sup>40</sup>。

このようにバンガーの扱った作品には、ナチの否定するフォーヴやドイツ表現主義のものが含まれている。さらに見逃せないのは、バンガーの取引したシュピロがユダヤ人だったことである。またバンガーの画廊でヴィースバーデンのシナゴーク設計の展示が行われたことを裏付ける新聞記事が確認できた<sup>41</sup>。それらを勘案すると、バンガーもまたユダヤ人であったと考えてよいだろう。

この例においても、ユダヤ系画商が、保守的な作品だけでなく、ナチの批判対象となる作品も手がけていたということができる。

### 3.6. ライプツィヒのミッテンツヴェイ・ヴィンジュ

再びエルヴィン・アルノルト博士の所蔵品に戻ると、ツェツィーリエとオスカーが、1907年1月10日から2月15日に、ミッテンツヴェイ・ヴィンジュなるライプツィヒの画商の下で開いた展覧会のパンフレットが残されている。同展の実施は、美術雑誌『万人の美術 *Kunst für alle*』の展覧会情報においても確認できる<sup>42</sup>。

このミッテンツヴェイ・ヴィンジュに関する資料もほとんど見出せない。わずかに入手し得たのは、かれが1888年のゴッホの油彩を元にした版画作品《農民》を、ライプツィヒ市立美術館に販売したという同美術館の説明である。現在作品番号 K/2012/426 が与えられている。かれの画廊は、前述のパンフレットにも書かれているが、ライプツィヒのグリマイツェ通り26番地に置かれていた。またザクセン州立図書館のわずかな目録データには、ミッテンツヴェイ・ヴィンジュが画廊の名称でもあり、さらに同名で額縁制作所も経営していたことがわかる<sup>43</sup>。インターネットのサイトからは、アーノルト・ベックリン (Arnold Böcklin: 1827-1901) の版画作品《春》を扱っていたことを示す写真データが確認できた<sup>44</sup>。ただ現時点ではユダヤ人であるか否かは判然としない。

このように若干の情報ではあるが、ミッテンツヴェイ・ヴィンジュはユダヤ人か否かは判明しないが、ドイツにおいて当時、評価の高かった画家ベックリンを扱う一方で<sup>45</sup>、ナチ時代に没落芸術と見なされたゴッホの作品を取り上げていたことにより、前衛的な作品に関心をもっていた画商であったことが理解される。



### 3.7 ツェツィーリエと画商との関係

ここまでツェツィーリエの関係した画商について、いかなる作品を扱っていたのか、またユダヤ人であるのか否かの確認を試みてきた。限られた資料によるとはいえ、ミュンヘンで活躍したツェツィーリエであったが、ミュンヘンだけでなく、ベルリン、ヴィースバーデン、ライプツィヒの画商と関係を持ち、それら5名のうち3人はユダヤ人、もう一人もユダヤ人の可能性が高いことが指摘できた。しかもかれらは、ツェツィーリエの保守的な作品の他にも、ナチが否定する現代的な作品を扱っていたことが確認された。

歴史的に見ると、ユダヤ人排斥が押しすすめられたのは、1935年のニュルンベルク法の成立によると説明されることが多い。しかし、ツェツィーリエの活躍したミュンヘンでは、第一次世界大戦終了後ナチ党が決起しているように、ナチ党は1920年代という早い段階から反共産主義と人種差別を標榜し、極右の思想の基に共産主義者とユダヤ人は排斥される動きがあったという<sup>46</sup>。

ツェツィーリエがユダヤ人画商と関わった年代について判然としないが、今回取り上げた蔵書票を例にすると、早い場合には1901年前後になると推察される。もともとミュンヘンの画商には、ユダヤ人排斥でアリア化されて登場するドイツ人の画商アドルフ・ヴァインミュラーのような存在がいたはずである。しかし今回の考察対象となった5人の画商のうち3人までがユダヤ系であることから、ユダヤ系の画商の存在は、当時の保守的な画家にとっても重要であったと考えるべきだろう。

そのことから、上述のように他の街に比べて早くからユダヤ人排斥が生まれるミュンヘンであっても、政治的な動向が画家と画商との関係を壊すほどすぐに影響を与えたとは考えにくいことを指摘しておきたい。近代美術を先導する役割をユダヤ系画商は担っており、そうした存在は、新しい作品を生み出す保守的な画家にとっても重要だったにちがいないからである。

### おわりに

小論では、ナチの略奪した書籍に貼られていた蔵書票を契機に、ナチ政権下で活躍した画家ツェツィーリエとユダヤ人画商との関係を考察した。それによって、ナチに高く評価された保守的な作風の画家ツェツィーリエが、それとは一見矛盾するように、前衛の画家をも取り扱うユダヤ人の画商と関係を持っていたことを確認できた。ナチはユダヤ人の画商を排斥していくが、画商アンナ・カスパリがナチ時代になっても、ナチ側の画商を手助けしたとの指摘があることや、今回のツェツィーリエと画商の考察から、当時の美術界においてユダヤ人排斥が美術界にとって非現実的な政策であった可能性を推察し得る。

#### 【欧文概要】

Malerin Cäcilie Graf Pfaff und Jüdische Kunsthändler - Aus Anlass eines Exlibris aufgeklebt auf den NS-Raubbüchern - Miyuki YASUMATSU

Bei der seit 2003 laufenden Suche nach NS-Raubgut in den Beständen der Bayerischen Staatsbibliothek wurden schliesslich vier Bücher gefunden, die sich durch ein Exlibris dem ehemaligen Besitz von Georg und Anna Caspari zuordnen liessen. 2014 sind die Bücher in London am Paul Caspari zurückgegeben worden. In Bezug auf dieser Provenienzforschung

untersuchte ich erstens, dass Malerin Cäcilie Graf Pfaff, die im “ Deutschen Tagebuch “ von Ogai Mori als Malstudentin aufgetreten ist, das Exlibris für Georg Caspari gemacht habe. Zweitens untersuchte ich über die Beziehung von Cäcilie Graf Pfaff als NS-Künstlerin mit den jüdischen Kunsthändlern (Georg and Anna Caspari, Wolfgang Gurlitt, Hugo Helbing, Richard Banger). Damit konnte ich feststellen, dass Cäcilie Graf Pfaff enge Beziehungen mit den jüdischen Kunsthändlern hatte, die sogenannte entartete Kunst handelten.

- 
- 1 Hrsg.v. der Koordinierungsstelle für Kulturgutverluste Magdeburg : *Kulturgüter im Zweiten Weltkrieg, Verlagerung- Auffindung -Rückführung*, Band 4, Magdeburg 2007.  
この書籍は、継続される責任と題して、ドイツの歴史、美術史、文化財の研究所や美術館、図書館などによる研究報告がシリーズでまとめられた一部である。2010年時点で7巻が発行されている。
  - 2 AFPBB ニュース 2014年5月7日。近年グルリットについては、ウィキペディアにも日本語専用頁が設けられている。<https://ja.wikipedia.org/wiki/コルネリウス・グルリット> (美術収集家)
  - 3 Susanne Wanninger u. Stephan Kellner : *Bibliotheks Magazin, Mitteilungen aus den staatlichen Bibliotheken in Berlin und München*, Nr. 4, 2014, S. 58-61.
  - 4 バイエルン州立図書館の調査結果は以下のインターネットで公開されている。<https://www.bsb-muenchen.de/ns-raubgutforschung/restitutionen/anna-caspari/>
  - 5 Susanne Wanninger u. Stephan Kellner, a. a. O., S. 58-61. (=註3)
  - 6 Art Conditions in Germany, in : *The American Art News*, July 17. 1920, Vol. XVIII, No.37, p. 4.
  - 7 ユリウス・ペーラー (Julius Böhler : 1860-1934) が1880年に「画廊ユリウス・ペーラー (Kunsthandel Julius Böhler)」を設立し、それを息子のユリウス・ヴィルヘルム・ペーラー Julius Wilhelm Böhler : 1883-1966) が引き継いでいる。
  - 8 Meike Hopp : *Kunsthandel im Nationalsozialismus, Adolf Weinmüller in München und Wien*, Wien 2012, S. 191. Hrsg. v. Hans Lamm : *Vergangene Tage, Jüdische Kultur in München*, München 1982, S. 293. Hrsg. v. Andrea Pophanken u. Felix Billeter : *Französische Kunst in deutschem Privatbesitz vom Kaiserreich zur Weimarer Republik*, München 2001, S. 222f.
  - 9 *Stadtarchiv München Biographische Gedenkbuch der Münchner Juden 1933-1945*
  - 10 拙稿「原田直次郎がドイツに伝えたもの：画家「ツェツィーリエ」の日本的な作品をとおして」『近代画説』第25巻、明治美術学会誌、2016年、66-82頁。
  - 11 ゴマデヴィは最初の夫となった画家ヴィルヘルム・バーダーとの間に1889年に生まれた。ツェツィーリエの唯一の子供である。1905年の銅版画《ダヴィデ》は、ゴマデヴィをモデルにしたことで知られる。その容貌は、蔵書票との類似が認められる。
  - 12 たとえば、2002年には美術フォーラムで印象派研究の特集を組み、批評・コレクター・画商と印象派のテーマで研究成果がまとめられている。ロブシュタイン・ドミニク「ある文筆家と画家たち—ジョルジュ・フェド—とその印象派絵画コレクション」(三谷理華訳)『美術フォーラム 21』第7号、2002年、87-90頁。また、2016年には西洋美術研究で美術史市場と画商の特集が組まれた。井口俊「展覧会評「ポール・デュラン＝リュエル、印象派の賭け」展『西洋美術研究』第19号、2016年、199-205頁。

- 13 ナチ時代については以下の研究がある。ゴデウラ・ブッフホルツ「ナチから『頹廢芸術』を守った画商カール・ブツヒホルツの生涯」（平川祐弘訳）『Aube』2、淡交社、2007年、146-166頁。Meike Hopp : Die Kunsthandlungen und Auktionshäuser von Adolf Weinmüller in München und Wien 1936-1945, in : *NS-Raubgut in Museen, Bibliotheken und Archiven*, München 2012, S. 395-408.
- 14 Anna Caspari, in : *Bayerische Landesbibliothek Online, Das Portal zu Geschichte und Kultur des Freistaats*, S. 1. <http://www.bayerische-landesbibliothek.online.de>
- 15 以下の論文でも現代美術との関係が指摘されている。Hrsg. v. Manfred Treml u.a. : *Geschichte und Kultur der Juden in Bayern*, München 1989, S. 274f. Hrsg. v. Andrea Pophanken u. Felix Billeter, a. a. O., S. 222f. (=註8)
- 16 Werner Zinkand u. Nina Raffalt : *Hans Gött, 1883-1974 Leben und Werk*, München 2000, S. 28.
- 17 *Der Tagesspiegel* am 11. April 2014.
- 18 *Der Tagesspiegel* am 11. April 2014.
- 19 Digitale Bibliothek Heidelberger Historische Bestände.
- 20 Hans Maria Wingler : *Oskar Kokoschka: das Werk des Malers*, Salzburg 1956, S. 61 und 317.
- 21 G. Biermann : *Lovis Corinth, Künstler-Monographien*, Leipzig 1913, S. 64f.
- 22 かれは間接的に日本に関わる。コリントの作品《ルムプフ家の肖像》は、大正時代に日本を放浪したとされたフリッツ・ルムプフの一族を描いたものである。
- 23 油彩、カンヴァス、64cm X 80 cm. Andreas Strobl : *Curt Glaser, Kunsthistoriker-Kunstkritiker-Sammler, eine Deutsch-Jüdische Biographie*, Köln 2006, S. 22, Amn. 48.
- 24 Andreas Strobl, a. a. O., S. 22. (=註23)
- 25 油彩、カンヴァス、64X80 cm Andreas Strobl, a. a. O., S. 22, Amn. 48. (=註23) 現在は、前者はパリのピエール・フェルネ&エディス・フェルネ・カラオグラン (Pierre Vernes and Edith Verness-Karaoglan) のコレクションに、後者はロンドンのスタヴロス・S・ニアルホスコレクション (Sammlung Stavros S. Niarchos) とされる。
- 26 フリッツの母親はユダヤ人であり、ユダヤ系の家系である。Maurice Philip Remy : *Der Fall Gurlitt, die wahre Geschichte über Deutschlands grössten Kunstskandal*, Berlin 2017, S. 35.
- 27 Lukas Bäcker : Hildebrand Gurlitts Biografie im Zeitgeschehen, in: *Bestandsaufnahme Gurlitt*, München 2017, S. 322.
- 28 *Neue Galerie der Stadt Linz, Wolfgang-Gurlitt-Museum*, Ausstellungskatalog, 1974.
- 29 電子データで整理されている。 <http://www.fotomaring.de/bestaende/uebernahm/gurlitt>
- 30 マールブルク大学写真アーカイヴスには、他に19世紀の画家モーリッツ・フォン・シュヴィントの《薪集め》、カール・シュピッツヴェークの《記憶の日》、ハンス・トーマの《森の端にいる子供達》の作例が紹介されている。 <http://www.fotomaring.de/bestaende/uebernahm/gurlitt>
- 31 初代リンツ市立美術館長として1946年から1956年まで就任している。 *Neue Galerie der Stadt Linz, Wolfgang-Gurlitt-Museum*, Ausstellungskatalog, 1974.
- 32 2016年の4月にミュンヘン中央美術史研究所でヘルピングの世界をまたにかけたオークションの特集が組まれてシンポジウムがおこなわれ、研究成果が報告されている。詳細は中央美術史研究所のホームページを参照。 <http://www.zikg.eu/veranstaltungen/2016/hugo->

- helbing-1863-1938-muenchener-auktionen-fuer-die-welt
- 33 いまでも一部改築されているものの、建物は現存する。
- 34 現在は美術オークション・ノイマイスター (Kunstauktionshaus Neumeister) となっているという。Vanesse Voigt u. Horst Kessler : *Die Beschlagnahmung jüdischer Kunstsammlungen in München 1938/39, Zum Verbleib der Kunstwerke*, Magdeburg 2010, S. 278.
- 35 Tony Straus-Negbauer : *Japanische Farbholzschnitte des 17. bis 19. Jahrhunderts*, Versteigerungskatalog, P. Cassierer und H. Helbing. Andreas Strobl, a. a. O., S. 268. (=註 23)
- 36 Andreas Strobl, a. a. O., S. 271. (=註 23)
- 37 ヒトラーが作品を購入している画家でもある。
- 38 *II. Frühjahr-Elite- Ausstellung Mai 1908, Wiesbaden*, Galerie Banger Ausstellungskatalog, Wiesbaden 1908, ohne Seite.
- 39 <http://www.mehlis.eu/de/catalogs/8116/15/?page=7>
- 40 [Sammlung-online.berlinischegalerie.de/eMuseumPlus?service=direct/1/ResultDetailView/result.inline.list.t1.collection\\_list.\\$TspTitleLink.link&sp=13&sp=Scollection&sp=SfieldValue&sp=0&sp=1&sp=3&sp=SdetailView&sp=0&sp=Sdetail&sp=2&sp=T&sp=0&sp=SdetailList&sp=0&sp=F&sp=Scollection&sp=1231860](http://sammlung-online.berlinischegalerie.de/eMuseumPlus?service=direct/1/ResultDetailView/result.inline.list.t1.collection_list.$TspTitleLink.link&sp=13&sp=Scollection&sp=SfieldValue&sp=0&sp=1&sp=3&sp=SdetailView&sp=0&sp=Sdetail&sp=2&sp=T&sp=0&sp=SdetailList&sp=0&sp=F&sp=Scollection&sp=1231860)
- 41 Rudolph Joseph : Zum Problem der Wiesbadener Synagoge, in : *Jüdischen Wochenzeitung Wiesbaden-Nassau*, 7. Okt. 1927.
- 42 *Kunst für alle*, 22. Jg. Heft 13, 1. April 1907, S. 314.
- 43 <http://archive.is/tXjX#selection-7207.0-7232.0>
- 44 <https://www.ebay.com/itm/Spring-Arnold-Bocklin-Klic-photogravure-1892-Bruckmann-Photographische-Union-/251276084994>
- 45 藪田淳子「原田直次郎《騎龍観音》《素尊斬蛇》における同時代のドイツ美術とベックリンの影響」『美術史論集』第 18 号、神戸大学美術史研究会 2018 年、65-88 頁。
- 46 Hrsg. v. Winfried Nerdinger : *München und der Nationalsozialismus, Katalog des NS-Dokumentationszentrums München*, München 2015, S. 17-74.

## 図版出典

図 1 《アンナ・カスパリ》

典拠 caspari\_staatsarchiv\_muenchen\_pol\_dir\_11822\_0058

図 2 《蔵書票ゲオルク・カスパリ》 エルヴィン・アルノルト所蔵

制作：ツェツィーリエ・グラーフ・プファフ、制作年：1901 年頃

典拠 筆者撮影